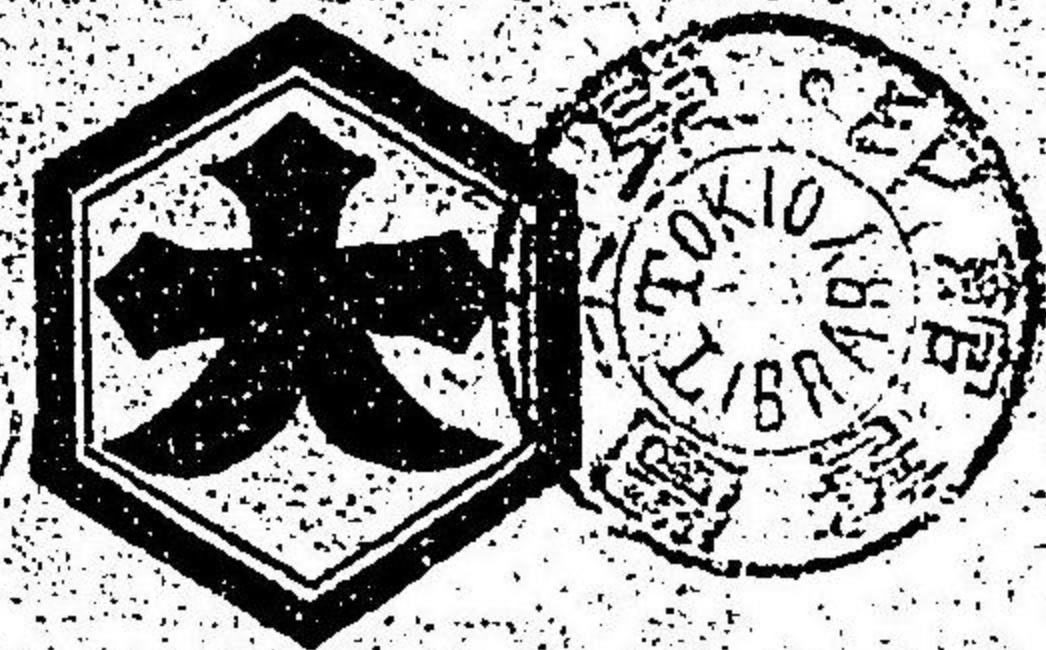


287



神道八雲教會神德略



014271-000-3

特55-114

神道八雲教會神德略

橘 市兵衛 / 著

M25

ABB-0611



神道八雲教會兵庫支部

寄附

擴張資金有志者

○神道八雲教會神德畧百部以上寄附せし諸君は其貴名を掲ぐ

神道八雲教會神德畧

神道八雲教會本院は出雲國飯石郡須佐村鎮座縣社須佐神社之境内に設置せり然れ共本教大教長須佐國造建勳首は當時同國神門郡今市町八雲教院に在勤し教務所此所に在り 抑も八雲三柱神と稱奉るは○天照大御神・健甕須佐之男大神・產土神を合せて三柱と申奉りて主神は八雲立出雲國飯石郡須佐鄉清之地なる神代創立之宮縣社須佐神社に鎮坐す 健甕須佐之男大神の御事にて世人誤て祇園牛頭天王と申せし神なり然れども祇園牛頭天王など申て三十番神の中なる神像を見れば頭上に牛面有てルヲ馬頭觀音は越後獅子の出來損ひの如く成れども我主神健甕須佐之男大神は決而左様なる化物か人と牛との間子の如き物に非ず。掛巻も長き天照大御神の御皇弟に坐まして則ち月神なり。則ち大神の御由來を尋ね奉るに神伊弉諾岐大神筑紫の日向の橘の小門の楹原に到り中瀬化下かづさて左御目を洗玉ひしに依て成坐る神の御名

は撞貫木殿御魂天陳向津比賣命は質性光華明彩坐まして天地に照徹り玉ひし故に父大神の勅を奉りて高天原を知食して遂に天照大御神と成玉ひ次にまた右の御目を洗玉ひしに依て成坐る神の御名は月讀命亦名は健甕須佐之男命此神の光明も御姉日神に次て自から月神の御徳備り玉ふ是則ち主神なり。於是伊弉諾岐大神御子須佐之男命に詔曰く汝命は青海原潮之八百重を知食せと事依し玉ひき然るに須佐之男命は父大神の依し玉ひし此國を治玉はずして御母を慕ひて八束鬚心前に至るまで哭いさち玉ひ御心荒び健び坐して高天原へ登り玉ふ時山川國土震動せり(是地震の始りにて全く四海の内地球を知食す神の御心荒び健び玉ふが故に山川國土も御心に連れて震動せり)爾高天原に坐す天照大御神問驚かして云々劔玉誓ひの段畧。於是天照大御神須佐之男命に詔曰く葦原中國に宇氣母智神有と聞けり汝往て見るべしと詔玉ひき故須佐之男命勅を奉りて天降り來坐して宇氣母智神の

御許に至りて其神に食物を乞玉へば其神鼻口及尻より種々の味物を取出し色々作備へて御饗奉る時須佐之男命其態を立伺ひて穢物進ると思はし御怒まして穢はし哉何故に穢物以て吾に養ふと詔玉ひて則ち其神を擊殺して天上に返り天照大御神に復命し玉へば大御神甚だ御怒まして一日一夜相見玉はず然して後天熊之大人を遣はして看しめ玉へば宇氣母智神實に既に死たり故其所殺玉へる神の身に生物は。顔上に粟生り。眉上に蠶と桑木と生り。目に稗生り。腹に稻種生り。陰に麥及大豆と小豆と生り。頂は牛馬と化爲さ故天熊之大人みな取持て奉獻る時天照大御神大に喜び玉ひて是人民の食て活べき物と詔玉ひて則ち。粟。稗。麥。豆を陸田種子と定め稻を水田種子と爲て又天邑君を定め則ち其稻を始て天次田及び長田に殖しめ玉へば其秋大に豐年せり又天香山に桑木を殖て蠶を養ひ其繭を口に含みて絲を抽き養蠶織織の業此時より始る(其宇氣母智神は伊勢の外宮に坐す豐受比

賣大神にて世に稻荷神と申も全く此神なり此神無りせば五穀蠶桑牛馬等の種有る事なし又須佐之男命其宇氣母智神を切殺し玉はざりせば普く世中に五穀を食ひ桑を殖て養蠶盛んにし牛馬を畜用する事能はず是全く須佐之男命其神を殺し其種を取らしめて廣く世中に配り與へ玉ひし御陰なり)於是須佐之男命勝さびに荒び健ひて春は御營田の畔を切毀ち溝を埋植を抜放ち頸りに種を蒔秋は穀物の成る時に絡繩を引渡し馬伏し申刺して農夫の足を傷ましめまた天照御大神新嘗聞食す御殿の御席の下に陰に尿たれ散し天照大御神しらす其上に座して御身を汚し玉へとも咎玉はずみ詔り直して容め玉へとも猶其惡業止すして大御神忌服屋に座して神之御衣を纏らしめ玉ひし時其屋の棟を穿ちて天之斑馬を生剝の逆刺にはぎて落入坐せり於是織女見驚さて梭に突れて身を傷たり故天照大御神御怒坐して則ち天石窟に入て石戸を開て刺幽居ましき是に依て高天原も天下も常闇と成り於是是神五

月蠅の湧が如に群發り諸の妖物みな發りたり(須佐之男大神荒び健ひ坐す時は諸の惡神妖物どもに隨ひて荒崇るなり是故に諸の禍物災等を防んとせば此大神の御心を和し奉るにしかじ)故是以て八百萬神愁迷ひて天安河原に神集云々石門開の段畧の於是八百萬神共に議りて須佐之男命に千座置戸の板具を科せて根國へ逐ひ降し玉ふ云々。於是健速須佐之男命御子五十猛神を帥て天之壁立極み廻り新羅國に天降り坐て曾戸茂梨の處に居坐て此處は吾居ま欲せずと詔玉ひて赤土以て舟を作り之に乗して東に渡り出雲國安來の埃之川上に來まして吾御心安く平ひに成ぬと詔玉ひしに依り其処を安來と云ふ。於是神速須佐之男命詔玉はく韓舞の島には金銀有り吾御兒の治さん國に浮寶有らすは佳らじと詔玉ひて則ち鬚鬚を抜て散し玉へば即ち杉と成り。又胸毛を抜てちらし玉へば是椴に成り。尻毛は楸に成り。眉毛は樟に成りかくて其費用を定玉はく。杉と樟と此兩木は浮

寶に作るべし(浮寶は舟なり今に和船を作るに杉と樟と用ふるは全く須佐之男命青海原を司り玉ふか故に海上を渡る機械を作り始め玉へり是に依て舟人漁師も必ず此神の御恩を忘るべからず)楡は瑞宮の材と爲べし。楸は棺に作るべしと詔玉ひて又昨ふべき八十木種もみな播生し玉ふ(凡柿梨子栗松柑梅杏等の類)其御子五十猛神初に天降り玉ひし時諸の樹種持て下り玉へとも韓地には殖すして盡く持返りて九州より始めて日本國中に悉く播殖て青山と成し玉ふ是故に五十猛神を稱へて有功之神と申奉る。於是健速須佐之男大神は出雲國簸之川上なる鳥上の地(仁多郡)に到り坐す時其川に符の流下りしを見て其川上に人家有りと思はし尋ね往き玉へば老夫と老女と二人の中に童女を置てかき撫て泣愁歎せる所へ入來坐して汝是誰ぞと問玉へば其老夫答けらく吾は國津神大山津見神の子足名椎妻が名は手名椎女の名は眞發觸奇相田比賣と申せり於是また須佐之男命汝等何故に哭

悲心哉と問玉へば復答けらく我女本より八稚女有り然るに此處に高志之八俣大蛇なる物一身にして八頭八尾有て其身に蘿及び檜杉生て其長さ船八谷峽八尾に渡りて其腹を見れば悉にいつも血爛れたりと白き故速須佐之男命其老父に是汝の女ならば吾に立奉ん哉と詔玉ふに恐乍ら御名をしらずと白ば吾は天照大御神の伊呂勢なり故今天より降り來坐つと答玉ひさは是於足名稚手名稚神然坐さば恐し勅まに立奉んと白き故速須佐之男命其童女を湯津爪櫛に取成て御美豆瓦に刺して(此時須佐之男命其稻田比賣の爪櫛を取り御自身の御頭を刺玉ひて夫婦の契りを結び玉ひて其妻の危難を助け國の大害を除ぎ八雲立の御歌を傳へて神人の心を和げ清之地に大宮作らして其妻の御両親の神を稻田宮主と成し玉ひ遂に大國主神に此日本國を開かしめ玉ひし故にかゝる尊さゝとも目出度御良縁をあやからんが爲に古より女子の信仰せしは此故なり)其足名稚手名稚神に詔玉はく汝等諸の菓を

以て八盪折の毒酒を造り且垣を作り廻らして其垣に八門を作り門毎に八の佐受伎を結び各一口の酒槽を置て其船ごとに毒酒を盛りて待へし我汝の爲に其大蛇を殺すべしと教へ玉へば足名稚手名稚神勅の如くして待し時八俣大蛇信に言ひし如く來りし故に須佐之男命其大蛇に詔玉はく汝はかしこき神なりいかで饗せざらんやと詔玉ひて即ち八雲の酒を以て口毎に注玉へば其大蛇船毎に頭を垂入て其酒を呑て醉臥たりさ則ち健速須佐之男大神十拳劍を振て切散り玉へば兼川血に變て流れ其骸は段毎にみな雷と化て飛躍りて天へ昇りさ然るに其尾を切玉ふ時御劍の刃少し欠し故に怪しく思はして御劍の鋒を以て刺割て見玉へば都牟刈之大刀有り其を取らして異しき物ぞと思はして御許に安置て齋玉ふ天之叢雲劍是なり蓋し其大蛇の居所の上に常に雲氣有り是より須佐之男大神は宮作るべき地を出雲國に求給ひて須賀地に到坐て詔曰く吾此地に來坐して我御心すがくしと詔玉ひて(是

までは荒び健び坐せしが此所にて更に本心に立返り玉ふ是に依て狂氣亂心の者も放蕩の者も親族の中より一心に此神を信仰し奉る時は本人改心して却て天晴譽を上る人と成る)此所に宮を作らして座ましき故其處を今に須賀と云ふ(則大宮の地是なり)茲大神初め須賀の宮を作り玉ひし時其地より雲立騰りたる(此に依て出雲と云ふ)を見て始めて御歌ひ玉はく。八雲立出雲八重がさ妻をみに八重垣作る其八重がさを。(此則ち和歌の始りにて此時より其道一筋に今に傳りたるは敷島の道なり。古歌に曰く。是のみぞ他の國より傳らで神代を受し敷島の道と有通りにて和歌の宗匠を始め敷島の道に遊ぶ諸人は貴賤を問はず此神を尊敬し奉るべきを其元を忘しか凡世間に歌人と稱せられし先生等の信仰せらるる所を見るに百の内九十五六までも和歌三神ばかりを祭て此神を尊敬せざるは本末を取違たるにわらずや夫皇國生乍ら外教に憚ひ日本魂を失ふて神を蔑ろにする者は神國の賊

魂なり敷島の道を唱へて八立雲の御歌の元を忘れ須佐之男大神を敬せざる者は歌道の賊なり。今大工は職工の人なれども上棟式の用には必ず屋船神手置帆負命彦狹知命等を祭りて其道の始祖の神を尊み神恩を忘れざるは是實に神國の人にわらずや。和歌は本にて和歌も道歌も連歌も發句も笠附も川柳も又琴の歌も三味線の歌もよしこのも流行歌も舟うたも馬丁の鼻うたに至るまでみな此八雲立の御歌の枝流なり總て歌は健速須佐之男大神の幸御魂にして諸神どもに感應坐まして守り助け玉ふが故に心の友と成るものなり依て深夜に道を行とも歌をうたへばさびしさを忘れ心賑しく成り又歌をうたひ乍ら仕事をするれば其勞を忘れて能く出来るは全く須佐之男命の幸魂が感守りて其事を手傳ひ玉ふが故なり)是於須佐之男命足名稚手名稚神を喚て汝等は我兒の宮の首任と詔玉ひて稻田之宮主須賀之八耳命と云ふ御名を玉ふ(是則須佐國造の遠祖之神にて此神より七十五世之神裔稻田宮

主翁佐國造(雲次郎建勳首は則ち本教大教長なり又神代より何々之命と稱し來りしが人皇十三代成務天皇の御世に大國小國の國造を定玉ひ則ち國造の號を賜ふ是に依て命の稱を止め更に須佐國造と稱せり又古へは國造出雲大郎次代を山雲次郎と稱し來り所中古に至て國司に稱て出の字省さ國造雲大郎雲次郎と稱せり)亦須佐之男命須佐鄉に到坐し時此國は小國なれども國處なり故吾御名は木石には著しと詔玉ひて即ち己命の御魂を鎮置て大須佐田小須佐田を定め玉ふ)主神實に田畑を好み玉ふが故に己命の御魂を田に鎮置て後世田畑の作物を守り玉ふ)是神社の良方に當り距里三丁其處を今に佐田と云へり亦須佐之男命奇稻田比賣命に御合坐て御子須賀之湯山主神を産しめ玉ひし所を誕生山と云ひ其山にて産玉ひし時汚物を柏の葉に包み松葉以て縫合せて流し玉ひし川を今に流瀬川と云ひ神社の西北に當り距里一丁にして誕生山の麓を流る又奇稻田比賣命御子湯山主神を抱

き繁名坂を越て湯淵の里にて産湯を浴させ玉ふ湯淵の里は神社の西北に當り距里廿丁にして反邊村なり神代の時始めて温泉の湧出し處にて其神を湯山主神と申も此神自から温泉を司り玉ふ御徳備り坐すが故なり(後世温泉に藥師佛を祭れども彼等は我國の神に非ずして何ぞ此國の温泉を自由にするの權有人哉温泉は則ち御名に負坐す須賀之湯山主神の司り玉ふ處に非ず哉)其温泉の跡は絶て今は川中と成れども此地に湯村神社とて該神を祭れる小祠有て土人今に湯村と云へり)須佐之男命神大市比賣命に娶坐云々國引の段尋す。於是健速須佐之男大神此天叢雲劍は神劍なり吾いかで私に齋置へさやと詔玉ひて孫子天葦根神を遣して天照大神に獻上り玉ふ時江の伊布貴山に落し劍なりと詔玉ひさ然而後健速須佐之男大神熊成降に座して遂に根之國に入玉ふ故亦御名を月讀命と申奉る云々。於是大己貴命は大屋比古神の御

教への中に根之堅洲國に到り須佐之男大神の御所に參り玉ひし時其御女須勢理比賣命出見て竊に御夫婦の契を結び御内に入坐して其御父の大神に甚麗しき神參來坐しつと白玉へば其大神出見て此は葦原醜男と云ふ神と告玉ひて即ち喚入て其蛇室屋に寝させ玉へば其妻須勢理比賣命蛇の比禮を其夫大己貴命に授て其蛇昨んとせば此比禮を三度振て打はらひ玉へと告玉ひし故に教の如く爲玉へば蛇自から解りて安々と寝て出玉ふ亦來日の夜は吳公と蜂との室屋に入玉ひしを且吳公と蜂との比禮を授て先の如く教へ玉ひし故に安々と出玉ふ(主神諸の惡神禍物妖災等を挫し玉ふ御威徳坐すが故に則ち蛇比禮蜂比禮吳公比禮生大刀生弓矢天之沼琴等の神寶を所持し玉ふ是に依て今に諸惡神の祟り禍物災害等退散を祈奉る時は其靈驗のたなり)於是須佐之男大神鳴鏑を大野の中に射放ちて其矢を探しめ玉ひさ故大己貴命其野中に入坐る時火を以て其野を燒廻らせり故逃出る所を知

らす感ひ坐し時鼠來て内ははらへ外はすぶくと云ける故に其處を踏玉へば洞穴に落入て隱坐し間に火は燒過たり於是其鼠其鳴鏑を昨持出來て奉れり其矢羽は其鼠子等みな昨たりさ於是其妻須勢理比賣命は喪具を持て哭來まし其父大神は已に死りしと思はして其野に出立せ玉へば則ち其矢を持返りて獻上玉ふ時に家に率入八田間の大室屋に喚入て御頭を取しめ玉ひさ故其御頭を見れば吳公多かりさ於是其妻椋樹の實と赤土とを其夫に授け玉へば其木實を昨破り唾出し玉へば其大神吳公を昨破て唾出すと思はし御心に愛く思食して御寢坐せり於是大己貴命其大神の御頭の御髮を握りて其室屋の椋毎に結付て五百引石を其室戸に取塞て其御妻須勢理比賣命を負て其大神の生大刀生弓矢及天沼琴を取持して逃出す時其琴樹に拂て地動響けり故御寢坐る大神聞驚きて其室屋を引小し玉ふ然れども椋毎に結付たる御髮を解玉へる間に遠く逃玉ひさ故大神豫母都平坂まで追到まして遙か

に鑿て大己貴命を喚ひて詔曰く其汝之所持之生大刀生弓矢を以て汝之庶兄弟をば坂之御尾に追伏河之瀬に追撥ひて意禮大國主神となり亦宇都志國玉神と成て其女須勢理比賣を嫡妻として宇迦之山の山本に底津石根に宮柱太知高天原に氷木高知て居是奴耶と詔玉ひさ。是に依て大己貴命は其生大刀生弓矢を以て八十神を滅し此葦原の中國を開き遂に大國主神と成りて此國を治め玉ひし處へ皇御孫命天降り坐し故に此國を獻上り坐て己命は幽冥の主坐と成玉ひ皇御孫命は天津日嗣を今上天皇に傳へ玉ひて此國を治め玉ひしも全く大國主神此國を開き玉ひしに依て皇御孫命天降りて知食玉ひしなり又大國主神此國を開き玉ひしも根國にて須佐之男大神深き大御心以て其神を懲し困めて種々の艱難苦勞に遇せて奮發の心を勵ませ玉ひしに依て遂に大徳備り大國主神と成玉ひしも全く須佐之男大神如此謀り坐て開運成しめ玉ひしなり是例に依て今に大徳俵れたる人は必ず艱難に遇ひ辛苦を浸きて漸

を後に徳備りて其事成就し遂しめ玉へるは即ち須佐之男大神の御情なり實に開運の道は此處に有り實に開運を守り玉ふ神は主神健甕須佐之男大神なり。また延喜式には須佐神社と有り出雲風土記には須佐社と有り中古より須佐大宮と云ひまた出雲大宮とも稱せり古は宮殿も廣大にして須賀川を隔て稻田比賣命の社有て本殿より此別室へ架したるを黒木橋と云ひて人の渡るを禁ず然るに保元平治の頃より世亂れて宮殿の破壊を修る道を失ひ此別室方り一社大に困窮せしが此大神別に勝佐備玉ふ程の御心にて深く武運を守り玉ふが故に爰に源頼朝卿仮に造營せられたりと雖も古形を變じて甚だ狭く成りぬ其後山中鹿之助と云る者有て宮殿に亂入して武器書類等數品を奪ひ去る此時一社の者其武勇を恐れて敵する者なし（是に依てか尼子家の再興を守り玉はよりけん）此時書類未ひしに依り豐臣將軍に至りて社領大に減少せられ聊の社領を有して神代相承の神事祭式を行ふ事數百年舊藩松

平家に至りて頼朝御造營の舊例に依り之が舊藩等負擔有しし社領は猶増加せられず維新の前舊藩主より更に五十石を増加せられたりと雖も收入三年を不備して明治維新の御世と成り社領は残らず上地し神官は只須佐家のみにして從來附屬の神官はみな解職せられ宮殿の造營修理等は氏子の負擔と成れり然れどもわづか百有八戸にして宮殿並に附屬建物等の修理費みかたく之に依て看々破壊の形狀を顯す事右の如し須佐神社は神代創立の社にして從來舊藩主代々の信仰は素より世人の信仰も出雲大社に次で其盛なる事地方人民に問て明瞭なり緣曰く郷を須佐郷と云ひ神社を須佐神社と云ひ祭神は須佐之男大神に座まして神官を須佐家と云へるは他にまた比類非るべし。かゝる聲を御徳坐す大神の鎮坐す神社も須佐郷の如き山間の地に在る時は縣社にして足納坐すか。元祇園社と云ひ牛頭天王など稱して神典にも見ぬ名にて祭らば鯉口變じて鈴と成たる神社も都の地に在る時は官幣

中社を下らず八雲立御歌の聲を慕ひ乍數島の道行く人は幾萬數へ盡せず其多ければ神代の元は忘れけん消之地に尋ね來て其始祖の神の宮に詣ん人の稀なるを思へば。かゝる廣大なる御神徳の須佐の山中に隱るひ坐して世中に顯はれ玉はざる事を己愁痛慍るしく思ひ餘り仮令官幣は受玉はず宮殿は古形の廣大に復せずともせめて本殿を擴張してかゝる廣大なる御神徳を世中に顯はして聊か大神の御心をなぐさめ奉んと欲するのみ

明治廿五年六月十八日

神道八雲教
六等講師 橘 市兵衛 謹述

神道入道教會兵庫縣下
擴張事務所長

六等講師 橘 市兵衛

請 掌 村上茂兵衛

本教擴張世話掛

住	米	增	山	富	高	山	木	增	庄	森	竹
吉	富	本	田	士	橋	本	下	田	田	田	野
久	和	清	藤	源	幸	常	紫	八	勘	佐	幸
四	吉	造	治	治	七	太	藏	平	郎	一	七
郎			郎	郎		郎				郎	

著者兼發行者

橘 市兵衛

當時兵庫縣神戸市兵庫佐
比江町百二番邸之壹同居

印刷者

明 藤 遷

兵庫縣神戸市坂本村五百
五十四番邸

明治二十五年七月十二日印刷并出版

20-70

5

1